

編集後記：前回、この編集後記を書かせていただいたのは、静止気象衛星ひまわり8号の打ち上げ直前の2014年9月でした（記事の掲載は翌月の10月号）。その後、ひまわり8号は無事に打ち上げられ、昨年7月より運用を開始したのはご存じのとおりです。小職は本年3月まで気象庁の気象衛星センターに勤務し、ひまわりの運用に関わっておりました。今年4月からは予報部に異動し、それまでの衛星データの提供からデータの利用へと立場が変わりました。ひまわり8号のデータについては、予報部でも利用が進められています。ひまわり8号の高解像度の10分毎もしくは2.5分毎の画像により、時々刻々の大気現象の監視・解析能力が向上しています。台風の追跡もより容易になりました。また、16バンドを利用したRGB画像についても利用が始まっています。衛星データから作成された大気追跡風や晴天輝度温度は、すでに数値予報の初期値として利用され、予報精度の向上に貢献しております。

一方、気象庁以外でも、ひまわり8号データはすで

に利用されているようです。民間の気象会社では、ひまわり8号データを利用した新しいサービスが始まっていると聞きました。また、大学や研究機関では、地球観測衛星のデータからこれまでに得られた知見を、ひまわり8号のデータに適用し、各種のプロダクト開発を行っているようです。今後は、ひまわり8号ならではの「高頻度」観測を利用したプロダクトや解析手法の開発が進むとともに、それらのプロダクトを利用した気象の解析や予測についても技術開発が進むと思われます。

新しいプロダクトや調査研究の成果については、広く共有することで、次のイノベーションの契機となります。これは、ひまわり8号についても例外ではありません。8号から得られた成果を学会諸氏と分かち合う場として、「天気」を活用していただければ、同号の運用立ち上げに関わった天気編集委員としては、望外の喜びであります。皆様からの投稿をお待ちしております。

(別所康太郎)